住谷悦治先生の古稀への寿詞

何時も若々しく、常にほほえみをたたえられた住谷先生の温容に接すると、この先生が古稀を迎えられたとは誰も信じ難いほどである。先生はそれほど心身ともにお若く、お健やかなのである。しかし大正十一年四月、東大法学部政治科卒業後、今日までの四十五年余の歳月は、必ずしも春風和光に充ちたのどかな学究生活ばかりではなかった。先覚者のみが辿る棘の道や煉獄の苦しみもあったのである。けれどもその蔭さえ残さない温容。先生には人間の善意と人類の明日を信ずる楽天的御性格がお在りなのであろうか。

恐らく若き日の先生は、同志社大学の学風に新風を巻き起されたのであろうし、同志社精神の昂揚にも努めてこられたことであろう。同志社の歴史に詳でないわれわれには知る由もないが、このことは、現在推されて総長の重責を荷っておられることからしても容易に想像できるのである。

われわれはこの古稀祝賀記念号の巻末にそえられた「住谷教授の歩みをきく」「略歴」およびたんねんに集められた「著作目録」を拝見して、今さら先生の人生行路は春らんまんとか崎嶇重畳とか形容しうるような起伏に富んだものであったことを想像するのであるが、一方また古きよき時代に、よき師、よき友、よき学校に学ばれたことを羨やましく思うものである。先生が社会思想史、経済学説史を中心として、その学問領域を拡げて行かれ、その及ぶところ、政治、社会、哲学、文芸、美術にまで亘るのであるが、これはその師、友人、時代の背景を抜きにしては考えられないであろう。われわれは明治の産んだ数々の偉大な啓蒙学者を想い浮べることができる。そして、住谷先生もその最

後のお一人に加えられるのであるまいかとさえ感ずるのである。いや先生の「日本経済学説史」を中心とするものは、日本の学問の処女地を開拓されたもので、パイオニアの栄誉は永く学界に残るものと信ずるのである。全く日本には珍らしく「いきの永い」学者の一人と言えるのではないであろうか。西欧の偉大な学者が晩年に及んで尨大な学問体系を組み立ててわれわれを圧倒するのであるが、住谷先生には、今後そのようなものを期待することができよう。われわれはその日のくることを秘かに願うのである。

明治、大正、昭和三代に亘り、東西両洋に亘る思想の遍歴七十年の風雪が醸し出した温順の純乎たるお人柄は、今後益々芳香を放ち続けるであろうし、またわれわれの導きの光でもある。先生の御健康の弥栄んことを希ってやまない。

昭和四十一年二月

経済学部長
小松幸雄